

平成28年11月6日発行

境町歴史民俗資料館  
〒306-0431 茨城県猿島郡境町大字西泉田1326-1  
電話番号 0280-81-3353 FAX 0280-81-3354  
開館時間 通常 9:00～16:30  
休館日 毎週月曜／祝日／年末年始

## ～高瀬舟と利根川水運～

河岸の町境(江戸と奥州を結ぶ境河岸)

今から400年前頃、境町の利根川河畔に東北地方や北関東から送られてきた荷物を大消費都市の江戸(東京)に船舶で輸送する境河岸(川の港)が築かれました。境河岸(境町)は江戸と奥州を結ぶ河川水運の要衝に位置づけられ、河岸の町として大いに繁栄することになったのです。

江戸時代は、陸上交通の輸送手段として主に馬や牛が利用されました。幕府は江戸の治安を守るため天險の地に箱根や栗橋などの関所を設け、江戸時代の幕府直轄の幹線道路である五街道は道中奉行が厳重に取り締まっていました。五街道(東海道・甲州道・中山道・日光道・奥州道)と全国の主要道路でもある脇往還(境町は日光東街道)が整備され、三都(江戸・大坂・京都)と各地の城下町が連絡されていました。

17世紀中頃になって、商品流通の飛躍的な発展で、各地の年貢米や生産物を大量に安価な費用で江戸や大坂の大消費都市に運ぶ必要性から、海上交通(江戸の河村瑞賢による東廻り海運・西廻り海運の整備)や河川(利根川・富士川・高瀬川の開削)、湖沼(琵琶湖・霞ヶ浦)などの水路の開削がすすめられ、江戸を中心とした水運網が確立されていったのです。

江戸時代初期に行われた利根川東遷によって、渡良瀬川と合流して江戸湾に流れていた利根川が常陸川に流路が連結され、銚子方面に改流されたことで、利根川河畔に築かれた境河岸に、多くの種類の川船が出入りするようになりました。なかでも、よく知られている川船が「高瀬舟」です。境河岸には船問屋や旅館、茶店などが立ち並び、船頭や荷揚げ人足、馬子、旅人たちが出入りして賑わいました。

また、境河岸には北関東、米沢(山形県)や陸奥(岩手県・宮城県・福島県)などの東北地方から、年貢米や特産物の荷物が集まり、境河岸からたくさんの荷物や旅人が高瀬舟で江戸に輸送されたのです。境町歴史民俗資料館に収蔵されている小松原家文書の「大福帳」(河岸問屋の荷請帳)には、江戸に輸送された主な荷物として、米・たばこ・鶏卵・茶・野菜・蓮根・牛蒡・綿・絹・漆・紅花が記されています。

ところで、境河岸から江戸へ荷物や旅人をのせて就航する高瀬舟は、帆を張って運航しました。境河岸を出航した高瀬舟は利根川を上流に向かって少し上り、分岐点から江戸川に入り、関宿(千葉県野田市)の関所で積荷の検査を実施し、通行許可証をもらい南へ下ります。江戸川を下り、行徳から隅田川を少し上がると江戸の両国・日本橋に到着します。高瀬舟が江戸に行くために要した時間は川を下っていくため約1日だが、境河岸に帰るために要する時間は川を上ってくるために約2日かかりました。高瀬舟は、利根川から江戸川を下って江戸に向かう時には、舵をうまくあやつって進みますが、江戸から境河岸に江戸川を上って帰る時は、二人の水夫が竹ざおを肩にあてがってこぎます。運よく自然の力が味方して、いなさの風(南東の風)が吹いた時は帆を張って風の力を利用して運航できたのです。



( 境町歴史民俗資料館 野村正昭 )